㊳ 新年摺

初鶏や草の戸をすく焚明り　素屋
雪にさす影もうるはし門かさり　松圃
理屈なき処々やうめ若菜　麦鳥
あらためて来て笑顔する札者かな　宗樹
正月に成て奇麗な寒さかな　素山
とめとなく転ふ手まりや長廊下　江三
大福やひと日忘れぬ朝こゝろ　文窓
楪やさなから青きうらおもて　茶雷
洞床へまはる日かけや福寿草　梅通

一はたけ向ふのを摘むわか菜哉　卓郎
明たれと灯もにきはして初雑煮　等栽
年々の尊さはこのはつ日かな　布山
元日は只居てはやき日暮かな　河暁
峰々にさはる雲なし四方の春　北梅
人も来てしつかや奥は筆はしめ　古友
隣とはちかくて遠き年始かな　留我
盛りたてる雑煮にくもるともし哉　挙一
元日や頭巾はかりは去年のまゝ　琴賀
子の日野の雪に終おと扇かな　曲川
松島へひとすち道や御代の春　乙也
元日や不断の人を人の見る　季成
御降はこほるゝと見て晴にけり　棹舟
喰つみをすゝめのそくあした哉　蒼湖
あら海やきのふにかはる初みそら　橘外
初空や柳まて来て眼にさはる　古谷
新らしいもの着て寒しけさの春　静夫
元日やきのふには似ぬ起こゝろ　盤齋
蓬萊やまわれはもとのおき処　井雨
坐を引て居れはまた来る礼者かな　末貫
人の日や朝の間に済む門掃除　静渕
みな春になれし四日の往来かな　史山
岩をこす波のしろさや初かすみ　潮堂
撰わける若菜に雪のしつくかな　万久住
福寿草このうへにさへあるほこり　兎國
洲の鳥もむき直りけり初日の出　碧水

年のうそいへぬ白髪や君か春　右橘
足もとの闇ははなれて初からす　習静
遣り羽子やはつむも人のこゝろより　靖路
みしかきもおとらす咲や福寿草　其宜
初空になる間や起てやゝしはし　素心
吹風のゆるみこゝろや去年ことし　峰秀
春立てはや暮ゆとる日あしかな　草尺
はる立や雲も霞とまかふ朝　普陽
何時としらす遊ふや花のはる　世員
うつくしき物のはしめやかさり海老　雨来
人の手にかけぬしまりや福寿草　東郊
年寄れとおもふ人なし花の春　汶路
鍬初にゆく人みゆる堤かな　百旨
福引に人の波うつ襖かな　泉舎
松高ふなるや入江の初日かけ　芦城
元日の光もちけりこほれ水　鳥岳
やり羽子もかしこうみゆる相撲哉　草友
引かへて出すよ屠蘇てはない銚子　羽人
子の行儀教へはせねと宿の春　壱岐
橙やころかる外に芸のなき　醉雨
年中の鏡のふたや懸想文　諸岳
あたるには間のあるやうそ初日影　嵐文
若水に明ほの、花咲にけり　文起
蓬萊の傍に似合し老夫婦　杜水
喰つみや朝々直す海老のむき　奇泉
ほとよきは人の花なりとその醉　木和
元日やはなれてすはるはしら際　市猿
日ぬくみに椽のぬれけり若菜籠　甘志
明行や霜の花さく松かさり　貫乎
名によつてものは愛度若菜かな　茶山
屠蘇の香や組さかつきの上ひとつ　帆道
冬からも野ては見たれと初からす　有節

ひと、せの思案しそめる二日かな　九峰